

## 「多文化社会とコミュニケーション」という科目の歴史的背景

近年、たくさんの大学で「多文化社会」や「多文化共生」という講義が開講されている。愛知県立大学は2009年度から「多文化社会におけるコミュニケーション」という授業を開講している（2014年度から「多文化社会とコミュニケーション」に）。わたしが学部生のころ（1998年から2002年まで）、そういった名前の授業はほとんどなかった。あったのは「異文化交流論」や「国際関係論」くらいのものだ。

日本で「多文化共生」というスローガンがひろく使用されるようになったのは、1995年の阪神大震災のあとだといわれている。それ以前は、英語圏からの輸入概念（翻訳語）としての「多文化主義（マルチカルチャリズム）」という用語が使用されていた。

多文化主義にせよ、多文化共生にせよ、そこでイメージされているのは、「社会には、さまざまな文化が共存している」ということだ。

近代社会では、一つの国家を、「一つの言語」（国家語＝国語）と「一つの文化」で統一することが理想とされてきた。しかし、現代社会では、そういった均質主義的（同化主義的）な社会観を反省し、さまざまな言語や文化が存在することを認知するようになった。多様性を抑圧するとか、一つに統一するのではなく、共存することを目標にかかげるようになった。かんたんに説明すると、このような歴史的背景がある。

「多文化社会」と名のつく授業のシラバスをみると、「外国人が増加したから」日本も「多文化社会になってきた」というような説明をしているものが確認できる。「多様性が外からやってくる」。それなら「それ以前」は均質だったのか？ そうではないはずだ。安田敏朗（やすだ・としあき）はつぎのように議論している。

何が問題かといえば、学界や政策立案レベルもふくめて、多言語社会を新しい問題かのように捉える傾向である。…中略…つまりは、多言語性のない社会などなく、それをだれがどう捉えるか、という多言語性認識こそが問題なのである。新しい問題としてみる立場は、これまで存在してきた多言語性に気づかないか、あえて無視して議論をしている。それは「単一民族・単一言語国家日本」を前提としたものであり、帝国日本という歴史やその結果として存在しているマイノリティの問題、先住民族、少数民族、そしてその言語、また手話という言語の存在を捨象して、「単一民族・単一言語国家日本」が、異言語・異文化の人たちをあらたに「受け入れる」といった認識である。たとえば、『多言語社会がやってきた』という本は、「様々な民族が日本に移住してきて、急速に多言語社会になりつつある」という認識を示し、「そのことから、言語に関して数多くの問題が生じてきて」いるが、この問題は、「私たちが21世紀を生き抜いていくためには取り組まなければならない問題」なのだと述べる。ここで示される観点は、安定した「単一民族・単一言語国家日本」に「外部」から攪乱（かくらん）要素が入ってきた、だから対応しなければならない、というものである（やすだ2010:142）。

安田は「多言語社会」について論じているが、「多文化社会」「多文化共生」についても、おなじことがいえる。つまり、文化の多様性のない社会など存在しないという観念にたつなら、いつもどこでも、あらゆる社会は「多文化」であるといえるのである。

日本では敗戦後、「単一民族」という幻想がつけられた（おぐま1995）。近代の日本には、沖縄の人たち、東北の人たちの言語を「標準語」に「矯正」させた、同化政策の歴史がある。アイヌにも日本語と日本文化に同化させる政策をとった。日本列島で話されていた言語は地域ごとにちがいがあつたが標準語を強制した。植民地や占領地では、皇民化政策によって、日本の文化を強制した。

その歴史をふりかえることも、多文化社会としての日本をとらえなおす手がかりになるだろう。

## 多文化社会論の類型

ここで、いまある多文化社会論をいくつかの類型に整理してみたい。そうすることで、その論者が、どのような視点から多文化社会を論じているのかを確認することができるだろう。

ここでは、とりあげる内容についての類型（判断基準）をつくってみる。

1. ニューカマー中心の多文化社会論
2. オールドカマーの歴史をふまえて、オールドカマーとニューカマーの状況を論じた多文化社会論
3. いわゆる「外国人」だけでなく、先住民の権利についても論じている多文化社会論
4. 外国人や先住民などの民族的マイノリティについてだけでなく、そのほかのマイノリティにも着目した多文化社会論（オールドカマー：何世代にもわたって日本に定住している外国籍の住民のこと。ニューカマーは、1980年代以降など、比較的最近日本にきた外国籍住民のこと。くわしくは第6回で解説する）

## この授業でめざす「多文化」社会論について

この授業では、一般的にイメージされている「多文化」社会論よりも、幅ひろいテーマをとりあげる。また、「外国人」や「少数民族」のように、マイノリティに注目するというよりも、制度のありかた、マジョリティ（多数派）とマイノリティの関係のありかたに注目する。それは、わたしが独自に、勝手にしているわけではない。たとえば、中島智子（なかじま・ともこ）は『多文化教育』という本で、つぎのように説明している。

多文化教育においてキーワードとなるのは、多様な背景をもつ子どもであるが、それは必ずしも外国人＝外国籍の子どもを意味しない。多文化教育は、今日では民族や人種だけでなく、ジェンダーや社会経済的背景、障害者、高齢者、同性愛者など、社会において不利益を被（こうむ）る立場におかれる人々を含むのが一般的だ…後略…（なかじま1998:24）。

…多文化教育とは隠れたカリキュラムも含めた学校文化の見直しであり、文化を相対化する視点であり、社会との関与を意識するプロセスである。また、多文化教育においてはマイノリティを主な対象とするのではなく、アメリカやイギリスなどでは「白人」性が問題とされてきているように、マジョリティ自身が問われている。民族や文化のちがいを意識しにくい日本社会において、「日本人」性を意識する必要は逆に大きいと考えられる…後略…（28-29ページ）。

1998年に出版された本ですでに、このように多様な視点にたつことの重要性と、マジョリティのありかたを問うことの必要性が論じられている。おなじような視点は、1982年に出版されたネウストプニーの『外国人とのコミュニケーション』でも確認することができる。ネウストプニーはつぎのようにのべている。

私はここで人間の多様性の一つのあらわれである「外国人」に焦点を合わせ、この外国人が「我々」とコミュニケーションを行なう時、どのような問題に直面し、それをどう解決するかを考えてきた。外国人問題からの「脱出」は、ここでキーワードの一つである。外国人としての悩みを経験した人は、とにかく、その状態からぬけ出たいという気持がある。これは当然の願望であろう。

しかし、この「脱出」説への反論もある。コミュニケーション、国際理解や国際行動のための教育によって、「外国人」の自己がしだいに失われ、国民性による差がなくなり、最終的には世界はなんのおもしろみもない、画一的なものになってしまうのではないか、それでいいのだろうか、という問題である。また、過渡期の人間は、どのような対策がとられようと、やはり悩むだろうという疑問もある。

…中略…すくなくともつぎの二つのことを考える必要がある。一つは、外国人の問題を社会の「異質集団」の問題という、より広い枠の中で再検討しなければならないという問題であり、もう一つは、これらの「異質集団」の性質が、人間の歴史とともにどのように変わってきたかを明らかにする、という問題である（ネウストプニー1982:166-167）。

わたしはネウストプニーが主張する「二つのこと」にほとんど賛同する。ただ、「国民性」などの表現は、現代的な視点からすれば適切ではないと感じる。文化を、国を単位にしてとらえた表現だからだ。ネウストプニーは、つぎのようにつづける。

社会の異質集団は、社会の「主流」と対立して存在している。たとえば、現在の日本社会では中央部に対して、辺地は依然として異質的なものと見なされがちである。同じく、男性に対して女性、中年層に対して子どもと老人、健康な人間に対して身体障害者、プロテスタントが多数を占める社会ではカトリック教徒、アメリカでは白人に対して黒人などの例があげられる。民族的異質集団——つまり、少数民族、移民、一時的外国人、旅行者など——もやはり、社会の主流との対比では、異質集団である。

だれが主流で、だれが異質的かは、権力の問題であり、簡単に数とか、価値で決まるものではない。…中略…あらゆる社会において女性は半数か半数以上を上まわるグループなのに、社会の主流をなすのは、やはり男性である。問題は、数とか質ではなく、力関係である（167-168ページ）。

ネウストプニーのいう「異質集団」は、「マイノリティ（少数派）」といいかえることもできるだろう。マイノリティは、ただマイノリティなのではない。マジョリティ（多数派）との関係においてマイノリティであるのだ。ネウストプニーのいう「問題は、数とか質ではなく、力関係である」というのは、そういった意味である。

まとめると、この授業では、多様な人たちが共存している社会において、どのような人たちが不利な状況におかれているのか、それは、どのような力関係によるものなのかに注目する。

## 移民は「やってくる」だけなのか？ 日本からの移民の歴史

多言語や多文化を「外部からの移入」としてとらえることの問題については、藤井毅（ふじい・たけし）も「多文化社会をどうとらえるか」という論考で、同様の指摘をしている。

考えてみれば、明治から昭和前期にかけて、日本は、海外への移民送り出し国として、他国の社会に異文化を持ち込む主体として存在していたのではなかったか。確かに日本社会にポルトガル・ブラジル語話者が増大したことは、新現象であり、かつて経験したことがなかったものであるかもしれない。しかしながら、それを南米に渡った日系移民の歴史体験と切り離して考えてしまうと、日本社会が他者により一方的に変容を強いられているという見方を暗黙のうちに容認してしまうことになってしまうのではないか。

…中略…

こうしてみると、「多言語多文化社会がやってきた」という状況分析は、近現代日本がたどってきた歴史に触れずして、日本社会をあくまでも他者により影響を受けるだけの受動体としてとらえていることがわかる。そこでは、他者に働きかける主体としての認識、あるいは、相互に影響を及ぼしあう存在という見方は、明らかに欠落している。その空白部に、「日本社会本来の姿が、外よりの影響で変わっていってしまう」という見方が入り込み繁茂（はんも）するのは、容易なことである（ふじい2010:38-39）。

藤井の指摘は、いわゆる「外国人脅威論」の問題を示唆している。現在の日本で、排外主義的な主張をくりかえしている人たちがいる。その人たちは、たとえば横浜にある「海外移住資料館」で、鏡をみることになる。

海外移住資料館では、日本からの移民の歴史を展示している。そのなかには、日本人移民にたいするバッシング（いわゆる黄禍論（こうかるん））なども紹介している。太平洋戦争中のアメリカにおける日本人移民の強制収容についても紹介している。図書室には、『Caught in Between 一故郷（くに）を失った人々』というドキュメンタリーのDVDがある（リナ・ホシノ監督、2004年）。2001年の9.11以後、アメリカでイスラム教徒やアラブ系住民にたいする国家的な迫害が開始されたことに対して、強制収容を経験した日系人たちが「歴史のあやまちをくりかえすな」と声をあげた。それを記録したドキュメンタリーだ。

ちなみに、おなじようなドキュメンタリーとして、2011年にNHKで放送された『渡辺謙（わたなべ・けん）アメリカに行く“9.11テロ”に立ち向かった日系人』がある。これは当時アメリカの運輸省長官だったノーマン・ミネタを取材したものだ。アメリカでは9.11後、アラブ系とイスラム系の飛行機の乗客には厳格な検査をするべきだという論調がわきおこった（人種プロファイリング）。ミネタはこれを拒否し、人種プロファイリングを実施させなかった。

強制収容をふくめた日系アメリカ人の歴史については、「Densho」というウェブサイトが参考になる（<http://nikkeijin.densho.org>）。写真やインタビュー動画などが豊富にある。

## 1990年入管法の改正—日系人とその家族が日本へ

1990年の入管法改正で、日系3世とその家族に「定住者」という在留資格が認められた（2世は「日本人の配偶者等」という在留資格）。定住者というビザは自由に労働できるものであり、南米からの日系人労働者がふえることになった。これが「在日外国人が増加した」要因の一つである。

ここで、1990年代に出版された「多文化」に関する本の一部をみてみよう。

田中宏（たなか・ひろし）1991『在日外国人』岩波新書（→新版1995年、第三版2013年）

中野秀一郎（なかの・ひでいちろう）／今津孝次郎（いまづ・こうじろう）編 1993 『エスニシティの社会学—日本社会の民族的構成』世界思想社（→2版1994年、3版1996年）  
マーハ、C. ジョン／本名信行（ほんな・のぶゆき）編 1994 『新しい日本観・世界観に向かって—日本における言語と文化の多様性』国際書院  
外国人地震情報センター編 1996 『阪神大震災と外国人—「多文化共生社会」の現状と可能性』明石書店  
三浦信孝（みうら・のぶたか）編 1997 『多言語主義とは何か』藤原書店  
中島智子（なかじま・ともこ）編 1998 『多文化教育—多様性のための教育学』明石書店  
言語権研究会編 1999 『ことばへの権利—言語権とはなにか』三元社

はたして、これまで、日本観や世界観をどれだけ「更新」することができたのだろうか。「多文化」の中身についてはどうだろうか。どれだけ充実させることができたのだろうか。

災害や防災に関していえば、最近のものとして『グローバル社会のコミュニティ防災—多文化共生のさきに』（よしとみ2013）という本がある。「ダイバーシティ（人の多様性）に配慮した避難所運営」（[http://blog.canpan.info/d\\_hinansho/](http://blog.canpan.info/d_hinansho/)）というサイトも参考になる。

1996年に出版された『阪神大震災と外国人』では、「今後」の展望についてつぎのようにのべている。

外国人地震情報センターは〔1995年の一引用者注〕10月から多文化共生センターと名称を変え、日常的に活動を継続することを決めた。震災で私たちはさまざまな経験をし、さまざまなことを学んだが、外国人に限ってみても、震災で見えてきた問題は日常のものであった。情報不足、言葉のカベ、制度上のカベ、どれも災害時だけの問題ではない。私たちの日常へと返していきたい（203ページ）。

阪神大震災からこれまでのあいだに、どれだけの変化があったのか、そして、改善されていない問題とはなにかについて再検討する必要があるだろう。

また日系人については、日本のなかでも集住地域と非集住地域があり、集住地域には自治体による多文化施策がとられている場合もある。在日外国人のコミュニティが形成され、学校や宗教施設などの交流の場がある場合もある。日本各地のとりくみや状況にも注目する必要があるだろう。日系人だけでなく中国帰国者（中国残留日本人とその家族）の集住地域もある。

### 「鎖国」史観をといなおす

ここで、時代を近世にさかのぼってみる。一般的に「江戸時代は鎖国していた」と認識されている。しかし、歴史学の領域では『朝鮮通信使をよみなおす—「鎖国」史観を越えて』（なかお1996）、『「鎖国」という外交』（トビ2008）、『それでも江戸は鎖国だったのか—オランダ宿 日本橋長崎屋』（かたぎり2008）などの本がある。いずれも、従来いわれてきた「鎖国」史観をといなおす内容になっている。

ロナルド・トビは、歴史学における「鎖国」史観の変化（みなおし）をつぎのように説明している。

…「鎖国」が完成したとされた…中略…1640年以降の日本は、東アジアにおいて確固とした存在感をもっており、東アジアの発展と歩調を合わせていた。従来の「鎖国」論は、日本がアジアの一員であることを無視して、ヨーロッパとの関係だけを切り離して論じていたといえるだろう。しかし、明らかに日本は東アジアに対しては国を閉ざしてはいなかったし、ヨーロッパに対しても完全に閉ざしてはいなかったのである。

そして、1980年代以降活発になってきた「鎖国」をめぐる研究を通じて、今日では研究者レベルでは「鎖国」＝「国を完全に閉ざしていた」という認識はほとんど否定されているとあっていいだろう。それを象徴するのが、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（歴博）の総合展示第三展示室（近世）のリニューアルである。

筆者も監修者のひとりとして協力したこのリニューアルは、数年の準備期間を経て、2008年3月に公開された。この新たな近世展示では、「国際社会のなかの近世日本」というコーナーがまず入室者を迎える構成になっている。そして、長崎・対馬（つしま）・薩摩（さつま）・松前（まつまえ）という「四つの口」を通じて中国（明・清）・オランダ・朝鮮・琉球（りゅうきゅう）・蝦夷（えぞ）といった異国・異人たちと交流をもち、世界とつながっていたという点が強調されている。説明書きでも、以前は「鎖国体制」という言葉が使われていたのに対して、リニューアル後は「近世日本は、『鎖国』をしていたと思われがちだが、東アジアのなかで孤立していたわけではない」などと、大きく変化している。

もちろん、近世日本が「鎖国」ではなかったとしても、完全に開かれていたわけではない。ただ、「鎖国」とされた近世日本の外交方針は、決して「国を閉ざす」という消極的なものではなく、江戸幕府が主体的に選択していったものなのである（トビ2008:19-20）。

現在、日本社会の閉鎖性を指摘し、それを問題視するとき、その閉鎖性の背景には「鎖国していた」ことにも原因があるという議論がある。これは、場合によっては、「そういった歴史があるから「仕方がない」という論理になってしまう。しかし、そもそも「鎖国」という認識そのものが歴史の一面しかみていなかったということだ。田中優子（たなか・ゆうこ）は『グローバリゼーションの中の江戸』で「近代になって「開国」という言葉が生まれたことが「鎖国」観を生み出したと思われます」と説明している（たなか2012:171）。

ちなみに、朝鮮通信使との交流の歴史を、いまでも継承している地域がある。たとえば、岡山県の牛窓（うしまど）は、朝鮮通信使が寄港していた町である。牛窓には、「海遊文化館」という朝鮮通信使についての歴史資料館があり、秋には「唐子踊り（からこどり）」という祭りを開催している。『グローバリゼーションの中の江戸』によれば、名古屋の東照宮祭や大垣の祭、津市の八幡祭、鈴鹿市の祭、下関や牛窓の祭など、朝鮮通信使が通ったところ、通らなかったところ、さまざまな場所で朝鮮通信使にちなんだ山車（だし）や行列や踊りが、今でも生きているという（141-142ページ）。現在、「多文化フェスタ」や「多文化まつり」が日本の各地でおこなわれている。「唐子踊り」や「唐人おどり」は、その先がけといえるだろう。

### そもそも「歴史」ってなんだろう

さいごに、歴史について。成田龍一（なりた・りゅういち）は『近現代日本史と歴史学—書き換えられてきた過去』で、つぎのように「歴史」について説明している。

…歴史とは、ある解釈に基づいて出来事を選択し、さらにその出来事を意味づけて説明し、さらに叙述（じょじゅつ）するものということになります。本書ではこれを「歴史像」と呼んでいきます。

ここでの前提は、歴史と歴史学は別ということ。歴史は無数の出来事の束から成っています。そのなかから重要な出来事を選び出し、関連づけ、意味づけて叙述し歴史像にしていくのが歴史学です。教科書はこうした歴史学によって解釈され叙述された歴史——実際には歴史像になりますが——を提示しているのです。

歴史学ではしばしば問題意識ということが強調されます。問題意識とは、歴史の無数の出来事のなかから、何を重要なものとするか、歴史のなかに何を求めるかということ（なりた2012:ii）。

なんらかの問題意識をもつことなしに、「多文化社会」を論じることはできない。どのような問題意識にたち、なにに注目し、どのように論じるのか。大学のレポートも、研究論文も、ポイントはそこにある。問題を設定する、問いをたてることが大事だということだ。社会のなかの、たくさんの出来事のなかから、なにに注目し、それをどのような観点から論じるのか。

### 参考文献

- 蘭信三（あららぎ・しんぞう）編 2011 『帝国崩壊とひとの再移動—引揚げ、送還、そして残留』 勉誠出版  
伊豫谷登士翁（いよたに・としお）編 2013 『移動という経験—日本における「移民」研究の課題』 有信堂  
植田晃次（うえだ・こうじ）／山下仁（やました・ひとし）編 2006 『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』 三元社  
岡部一明（おかべ・かずあき） 1991 『日系アメリカ人 強制収容から戦後補償へ』 岩波ブックレット  
岡部牧夫（おかべ・まきお） 2002 『海を渡った日本人』 山川出版社  
荻野昌弘（おぎの・まさひろ）／蘭信三（あららぎ・しんぞう）編 2014 『3.11以前の社会学—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』 生活書院  
小熊英二（おぐま・えいじ） 1995 『単一民族神話の起源』 新曜社  
片桐一男（かたぎり・かずお） 2008 『それでも江戸は鎖国だったのか』 吉川弘文館  
小宮まゆみ（こみや・まゆみ） 2009 『敵国人抑留—戦時下の外国民間人』 吉川弘文堂  
塩原良和（しおはら・よしかず） 2012 『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』 弘文堂

高橋幸春（たかはし・ゆきはる） 2008 『日系人の歴史を知ろう』 岩波ジュニア新書  
田中優子（たなか・ゆうこ） 2012 『グローバリゼーションの中の江戸』 岩波ジュニア新書  
トビ、ロナルド 2008 『「鎖国」という外交』 小学館  
中尾宏（なかお・ひろし） 2006 『朝鮮通信使をよみなおす』 明石書店  
中島智子（なかじま・ともこ） 1998 「序 多文化教育の視点」 中島智子編 『多文化教育—多様性のための教育学』 明石書店、13-31  
成田龍一（なりた・りゅういち） 2012 『近現代日本史と歴史学—書き換えられてきた過去』 中公新書  
ネウストブニー、J.V. 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書  
ひろた まさき／横田冬彦（よこた・ふゆひこ） 編 2011 『異文化交流史の再検討』 平凡社  
藤井毅（ふじい・たけし） 2010 「多文化社会をどうとらえるか」 『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』 別冊3、37-44 (<http://hdl.handle.net/10108/63698>)  
安田敏朗（やすだ・としあき） 2010 「日本語政策史から見た言語政策の問題点」 田尻英三（たじり・えいぞう）／大津由紀雄（おおつ・ゆきお） 編 『言語政策を問う！』 ひつじ書房、133-147

## 用語解説

学校文化：学校における教員のありかた、学校の教育システム、カリキュラムや校則など、学校で当然視されているものと、規範を表現したもの。どちらかといえば、批判的な意味で使用する。

同化：不平等な関係においては、一方がもう一方に同化をせまられる。しかし同化にはおわりがない。権力をもつ側は、いつでもその同化の努力を無化して、出自を根拠に「他者化」したり、同化が不十分だと非難したりする。

日本からの移民：移民先は、ハワイ、グアム、北米／南米、植民地朝鮮・台湾、樺太（からふと）、「満洲国」、フィリピン、南洋諸島など。敗戦後、移住地、あるいは植民地・占領地から「引揚げ（ひきあげ）」した人たちがいる一方で、戦後に海外に移住した人もたくさんいる。参考になる資料館として、神戸市立海外移住と文化の交流センター、長野の満蒙開拓平和記念館、京都の「舞鶴（まいづる）引揚記念館」がある。和歌山市民図書館には移民資料室がある。

日系人強制収容問題：「第二次大戦中、アメリカは米国市民をふくむ12万人の日系人を内陸の収容所に抑留した」（おかべ1991:2）。この問題に関して、公民権運動（アフリカ系アメリカ人に対する差別撤廃をもとめた社会運動）の影響をうけた日系アメリカ人三世が中心となり、アメリカ政府に謝罪と補償をもとめた。アメリカ政府は1988年に公式に謝罪し、補償した。一方、戦時期に日本に滞在していた「敵国人」に日本がおこなったことについては、『敵国人抑留—戦時下の外国民間人』にくわしい（こみや2009）。捕虜に対する日本の戦争犯罪については『レイルウェイ 運命の旅路』という映画がある。真田広之（さなだ・ひろゆき）が演じた通訳者の永瀬隆（ながせ・たかし）は実在の人物で、いろいろな本を出版している。

## より理解をふかめるために

- ・論文、雑誌記事検索サイトのサイニー (<http://ci.nii.ac.jp/>) で「移民」「多文化共生」などの関連用語を検索。
- ・書店や図書館にある「多文化」についての本が、どのような視点や内容で構成されているのか、もくじをチェック。

## 質問と紹介

日本における多文化教育について考察するとき、部落解放運動と同和教育の歴史を無視することはできない。しかし、同和教育は実施していた自治体と実施していない自治体がある。また、最近では「同和教育」ではなく別の名称で実施されていることもある。日本の部落差別について、これまでどのようなこと、どのような場で学習してきましたか？

奈良の水平社博物館、大阪人権博物館（リパティおおさか）や三重県人権センターなど、部落差別について学習できる文化施設がいくつかある（大阪人権博物館は2020年6月にいったん休館し、移転を検討していると報道された）。

## コメントの紹介

私はコミュニケーション方法の多様性について考えました。私は中学生の時に病院で職業体験を経験させてもらいました。その病院は普段私が行くような総合病院ではなく、筋ジストロフィーなどの難病入院患者を専門に対応している病院でした。寝たきりや車椅子生活の患者さん、ことばを発することも出来ない患者さんが多く入院していました。病院に行くまで、手を自由に動かさなかったりしゃべることの出来ない患者さんたちがどうやってナースコールをしたり、コミュニケーションをとっているのだろうと不思議でした。実際は、手の少しの動きで反応するナースコールや、口で文字を入力出来るパソコンを使って看護師さんと会話をしていたりと、それぞれの患者さんに合ったコミュニケーションツールを活用していました。この光景をみるまで、喋ることで自分の意見を伝えるということが普通だと思っていた私は、体を動かすことが出来ないから会話を断念するのではなく、その人に合った方法で会話を意思疎通を可能にするということにとっても感銘を受けました。それと同時に少しでも出来ることを探して活用することが大切なんだと思いました。人にはそれぞれ得意なこと、不得意なことがあるため、コミュニケーション方法も多様で当たり前なのかも知れないと考えさせられました。

しかし、実際に相手と共通する点がなければ実際に意思疎通を図ることは困難であるとも思います。例えば、手話を使って会話をする人がいても、手話が全く読むことが出来ない私は会話をする事が出来ません。もし、相手が文字を読み書き出来れば筆談をすることが出来ます。なぜなら、共通点が文字にあるからです。自分とは異なる相手のことを考えて、共通点やできることを見つけることが、障壁を越えて近づける第一歩なのではないかなと考えます。一方で、視覚も聴覚も奪われている人とはどうやって会話をすればよいのでしょうか。ヘレン・ケラーのように喋ることが出来る人はすごくまれで、私は考えても考えても、どのように意思疎通をすればよいのかの思いつきません。すごく難しいことではありますが、相手がハンデを抱えているといった理由で会話を諦めるのはすごく悔しいと思います。そのような人たちが社会から除外されてしまうのは仕方がないのでしょうか？先生ならどのように盲ろう者とコミュニケーションをとりますか？

【あべのコメント：とてもいいコメントですね。ポイントがおさえられている。盲ろう者のコミュニケーションについては配布資料で簡単に説明してあります（2ページ）。それこそ、相手との共通点を知らずに意思疎通の方法を「思いつく」ことはできないでしょう。手話で生活してきた盲ろう者もいるし、音声言語で生活してきた盲ろう者もいる。生まれつき視覚と聴覚に障害がある人もごく一部います。たいていは人生の途中で視覚と聴覚の重複障害になっている。その人のコミュニケーション手段が自分のできるものなのか、学習すればいいのか、通訳してもらうのか。コミュニケーションは、具体的に存在している人を相手にするものです。そして、通訳を介すこともコミュニケーションです。】

今期に受講している講義の中に合成音声を使っているものがあります。その講義は動画方式で、スライドに合わせて合成音声を入れているものなのですが、違和感を感じている人が多いようです。私はそれに対して違和感を感じないし、頭にも入ってくるのですが、どうしても受け付けられない人もいます。先日youtubeで災害情報系の動画を観たのですが、その動画も合成音声をつかっておりコメント欄でそこについて叩かれていました。主に、大事な情報発信で変なものを使うとか、視聴者を舐めているといった具合です。動画投稿サイトには主に合成音声を使ったゲーム実況であるゆっくり実況という物も存在します。このジャンルはとても人気で多くの視聴者がいます。そういった動画のコメント欄にはもちろん合成音声を叩くようなコメントはありません。こういうところからも合成音声に対する嫌悪感は本当にピンキリだといえます。このことに関して私は不気味の谷現象が起こっていると思います。不気味の谷現象とは、人間はロボットが人間に近づくにつれ好感を覚えるのですが、ある一点を超えると嫌悪感を示すようになり、さらに人間に似ていくとまた好感を覚えるという現象です。そして今合成音声は不気味の谷の谷底にいると思います。これから合成音声がバリアフリーや多文化社会のなかで良いものになっていくためにはこの不気味の谷を乗り越えることが重要だと感じました。

…私のいとは手や足を動かすことが難しく、普段車椅子で生活している。そのことを友人に話すと、多くの友人がそれ以上触れてはいけないことのように身構えて、すぐに別の話題に変えたりする。どうして人の苦手なこと・ものや好きなこと・ものは普通に話すのに身体のことには避けるのか、気まずい感じになってしまうのか、と思う。…

私は障がい者の方たちのことを助けたいと思っているけれどもうまく手伝うことができません。私は街で盲目の人が歩いてくるのを見ても距離を置いて離れることしか出来ません。…

【あべのコメント：なれた道を歩いているときに声をかけられても困る場合だってあるでしょう。その人が介助を必要としているかどうかを判断することが必要です。】

ユニバーサルデザインやバリアフリーを考えることはとても難しいことだと思います。なぜなら、自分たちは当事者ではないからです。…

-----

…自分にはその人たちにはなれないので考えれば考えるほどわからなくなります。…

【あべのコメント：わからないと自覚することが第一歩として必要です。わからないからこそ、相手（当事者）に確認することもできるし、確認するまえに、調べることができる。同じ質問をされつづける立場も、大変ではあります。】

-----

…「多文化社会とコミュニケーション」という講義ですが、今回は“障害”というワードに関わる話題が多かったです。“障がい者”という枠はありますが、その線引きはないとわたしは思います。例えば、ユニバーサルデザインということで、車いすの方でも使いやすい自動販売機があります。これはもちろん車いすの方は使いやすいと思います。元の自動販売機では、上の方が届かなかったから。しかし、背の低い人にとっても元の自動販売機は使いづらいと思います。私自身も背が低いので（これもどこから背が低いというのかはわかりませんが）、ユニバーサルデザインの自動販売機はとても使いやすいと思います。では、背が低いことは障害ではないのでしょうか。車いすの方も、背が低い方も、自動販売機に対する使いづらさは同じです。生まれた時から障害があったり、事故などで障害が残った人がいるように、なりたくて背が低くなったわけではありません。そう思うと、何が障がい者で何が障がい者ではないのかよくわからなくなってしまいます。飛躍しすぎた考えかもしれませんが、ユニバーサルデザインでも、元の大きさのまま下の方にも飲み物を選ぶボタンがある自動販売機と、自動販売機自体のサイズが小さくなった自動販売機があると思います。後者の自動販売機は、本当にユニバーサルデザインなののでしょうか。小さくなった自動販売機は背の高い、腰の悪い方にとっては使いづらいかもしれない。“誰にとっても”使いやすいものというには果てしなく難しいことだな、と考えさせられます。…

【あべのコメント：物事は相対的だということです。わたしは身長が186センチくらいですが、日本の家屋は危険がいっぱいです。ふと気をぬくと頭をうちます。出血するほどのケガをすることもよくあります。身長186センチだって、アメリカ人にいわせれば「ノーマル」です（大学生のときの経験）。】

-----

…遊園地に行ったとき、1時間弱の待ち時間のジェットコースターに並んでいたら外国人の方が、乗る直前になって身長が高すぎて乗れませんと言われていました。しょうがないことだけど1時間弱も並んだのにとってもかわいそうだと思います。もしかして「身長制限があります」という看板の日本語が読めなかったことが原因だったとすると意外なところにも外国語表記が必要なんだと気づかされました。駅や空港では外国語表記されているものをたくさん見かけるけど、思いがけないところに外国語表記を付け加えるべきところがあるのかも知れないと思いました。…

-----

私は、会議に手話通訳者だけがいてもみんなが参加できるわけではないと考えた。なぜなら、耳が聞こえない人以外にも外国人がいれば言語の通訳者が必要であるし、目が不自由な人がいれば資料や画像を読み上げて伝える人も必要となる。また、体が不自由な人がいればその人を自宅から会議室まで連れていく人が必要だ。あるいは、自宅からでも参加できるようオンライン体制を設置することも一つの選択肢だろう。…

【あべのコメント：見えない人の場合、会議資料が紙（墨字）ではなく、データで提供されるならパソコンの読み上げ機能で聞くことができます。資料を点字で配布するという選択肢もあります。一方、パソコンに慣れていない中途失明者であれば介助（資料の読み上げや補助説明）が必要でしょう。人の手が不必要な場合も、必要な場合もある。】

-----

…「会議に手話通訳者だけいれば、みんなが参加できるだろうか」→要約筆記や触手話が必要な可能性もある

【あべのコメント：よく読んで理解していますね。すばらしい。】

-----

私は昨年度、「諸地域言語『日本手話』」という授業を受講していました。その授業は、先生もろうの方で、授業中は一切の音声なしで、全て手話で行われます。それまで私は、身近にろうの人がいたこともなかったため、ほとんど何も知らない状態で日本手話の勉強を始めました。当たり前のことかもしれませんが、ろうの方たちにとっての言語は、彼らが生まれたときからずっとその日本手話であり、それが文化なのです。そのことに、手話を学び始めてから気づきました。それまでの私は、「ろうの方々は、手話を学び始めてからどれくらいでマスターできたのだろうか？」なんてことを考えていましたが、それは私たちが生まれて日本語を習得するのと同じように、日本手話が言語であり、独自の文化があったのです。…

-----



私は2年前、県大主催の聾者のイベントに参加した。手話や聴覚障害に興味があったわけではなく、「自分の志望校が開催しているから」という軽い動機で参加したが、そこには多くの発見があった。このイベントの軸となるのが『ヴァンサンへの手紙』というフランス映画だ。登壇した聾者の牧原依里さんは、耳が聞こえない者のコミュニケーションについて考える本作を日本にも広めたいと、自身でこの映画を買い取った人物だ。彼女のこんな言葉が心に残っている。「大学や就活の説明会に行くと、手話の通訳者も発言者の言葉を文字化するものもない。知りたいことがあって足を運んでいるのに、十分な情報が得られない」「人々はもっと周りへの気配りが必要だ」。実際にその会場では、登壇者は手話または手話と発話でスピーチや対談を行い、聴者のために手話の内容を口頭で伝える通訳がいた。また、スクリーンにはその通訳の言葉を自動で文字に表したものが映され、聾者は手話と文字の両方から情報を入手できるようになっていた。言われてみれば、耳が聞こえない人にとってこれらのサポートは当然だ。しかし、私はここに参加するまでこの当たり前のことに気が付かなかった。…

-----

マスクをするだけでコミュニケーションに大きく支障が出るというのは主に手話で会話する方もそうだと思う。手話は手で話す書き、手の動きのイメージがあるが実際は表情がかなり重要である。だからこんな時期でもニュースを通訳する方はマスクをしていない。…

【あべのコメント：口の動き（口型）は手話の文法にも関係しますからね。】

-----

私は昨年度、「諸地域言語『日本手話』」という授業を受講していました。その授業は、先生もろうの方で、授業中は一切の音声なしで、全て手話で行われます。それまで私は、身近にろうの人がいたこともなかったため、ほとんど何も知らない状態で日本手話の勉強を始めました。当たり前のことかもしれませんが、ろうの方たちにとっての言語は、彼らが生まれたときからずっとその日本手話であり、それが文化であるのです。そのことに、手話を学び始めてから気づきました。それまでの私は、「ろうの方々は、手話を学び始めてからどれくらいでマスターできたのだろうか？」なんてことを考えていましたが、それは私たちが生まれて日本語を習得するのと同じように、日本手話が言語であり、独自の文化があったのです。…

-----

…日本では手話が明治時代に入ってきたにもかかわらず言語だと法律で2011年まで認められていなかったことを知り、驚きました。…

【あべのコメント：日本手話は、日本で聾（ろう）学校が設立されて、ろう者の集団が形成されたことで誕生した言語です。外国から「入ってきた」ものではありません。韓国や台湾の手話は、日本の植民地時代に定着したもので、日本手話との共通性が高いです。手話の多くは、ろう学校の設立、そして寄宿舎での生活などで誕生したものです。ろう者の人口比が高い島などで誕生した手話などもあります。人間は言語をつくりだす能力があるのです。音声言語だって、大昔に集団が形成されて誕生したものです。手話言語も、それは同じ。／2011年の障害者基本法の改正で「言語（手話を含む）」と明記されました。】

-----

点字は文字を点に置き換えているような感じだとイメージできるが、手話言語は音声言語とは違うと言うのはどう言うこと？日本語など他の言語に当てはめているわけじゃないと言うこと？文法とかも全く違う？なぜ音声言語と区別されるのかよくわからない。…

【あべのコメント：素晴らしい。そうです。文法も「全く違う」。外来語として音声言語の単語を使用することはあります。そこで使用されるのが指文字ですが、指文字イコール手話ではない。】

-----

…手話言語にはかきことばがない（文字化の研究はされている）。とあるが、手話を視覚で認識できる人であれば書かれた言語を読み取ることは可能ではないだろうか？なのにわざわざ手話言語を文字化に落とし込む必要はあるのだろうか？と思った。というよりも手話を文字化と言われると、象形文字のようなものを思い浮かべてしまう。

【あべのコメント：「書かれた言語」とは、要するに音声言語の書きことばです。情報処理の一例として、手話アニメーションってありますよね。手話の表記システムがあれば、電子化しやすい。英語や日本語などの音声言語はテキスト化されている（書きことば＝表記システムがある）からこそ、電子化され、自由に活用されているわけです。それと同じことを手話でもする必要はある。ただ、手話話者にとっては、そんな表記システムよりも、手話の動画が利用しやすい。】

-----

バリアフリーのところを読んで急にディズニーを思い浮かべました。私の妹は生まれつき足に障害があり長時間歩くのが困難なため、ディズニーは毎回車椅子でまわります。何も障害を持っていない人からしてもディズニーは夢の国ですが、私たち家族はいつも行く度に「ディズニーほど障害者に優しい場所はない」と話をします。なぜなら施設とキャストさんがこちらのことを最大限配慮してくれていることがすごい伝わるからです。アトラクションに乗る際、まずキャストさんが私たちに気づいて声をかけてくれて、アトラクションの特徴や緊急時の対応などを一個一個ジェスチャーで示しながらとてもはっきりゆっくり説明してくれます。そしてほぼ全てのアトラクションにおいて、乗る直前まで車椅子で行けるように、場合によっては出口の方が広いからといって出口の方からわざわざ案内してくれることも何度もありました。キャストさんは、妹が車椅子に乗っているのでも足に障害があることはわかっていたと思いますが、予想される動きをわざわざジェスチャーで伝えてくれたりゆっくり話してくれたりして、あらゆる可能性を考慮して配慮してくれているんだなといつも思います。そういったところがUDの定義中の「可能な限り最大限に」に大いに通ずるものがあるなと思います。みんなのタイピングの速さが速くてびっくりというか焦りを感じました、耳で聞いていることを瞬時にタイピングするような二つのことを同時に行うのがかなり苦手です、

【あべのコメント：あのとき、視聴していた学生で「みんな速い…」と感じていた人もたくさんいたと思いますよ。つまり、「みんな」じゃない。】

…日常生活の中で気になったことは病院に予防接種を受けに行った際に病院にいたほとんどは高齢者の方々でしたが番号を映すパネルは私から見ても小さくて見づらく、番号を呼び出すときもパネルに番号とともに音が流れるだけであり気づかない人も多く、何度も看護師さんが直接その人を呼びに来る姿がありました。私はフードコートの音を立てて振動する呼び出しベルのようなもののほうが気づきやすいのではないかと思いました。

【あべのコメント：音と振動で伝えるというのは、かなりバリアフリーなんですよ。】

私は幼児教室でアルバイトをしており、前に立って話すときには聞こえやすいように大きな声でハキハキと話すようにしています。しかしある子に「先生静かにして、耳がキンキンする」と言われたことがありました。その子は特別音に敏感だったのですが、みんなが聞こえるようにするためにはある程度の声量が必要なため私は困惑してしまいました。すべての人のニーズに応えることの難しさを実感した場面でした。…

コロナ渦において、なるべく多くの人々が触るボタンなどに触らないようにと呼び掛けているが「触る」ことが情報を得る重要な手段である人への配慮が欠けているように感じた。状況に対する理解が無ければ肩身の狭い思いをさせてしまうことも考えられる。…

ことばで人が排除されるという話ですが、若者の間では「あーね（『あーなるほどね』の略語）」「JK（『女子高生』の略語）」「エモい（英語のエモーション【emotional：感情的な、興奮した】から出来た造語）」のような新しい言葉が常に生まれ、まさに「ことばによる中高年者・高齢者の排除」が行われている一方で、これらの言葉は「若者言葉」という一種の言葉の 카테고리 としても認識されています。ことばのバリアフリーという面で考えると改善すべきですが、前回のテーマであった文化の面で考えると「若者特有の文化」として尊重されるべきだとも言えるのではないかと思います、難しい問題だと感じました。…

【あべのコメント：言語文化の根本にかかわるポイントです。人間は仲間をつくります。すると、その集団だけで通じる表現がつけられます。同じことばを仲間と共有することで一体感がうまれます。言語文化とは、そういうものです。一方で、公共性の高い情報に関しては、仲間うちだけで通じる表現ではなく、わかりやすい表現をえらぶ必要があるということです。なので、個人のレベルでも、状況や相手に応じて話しかたを変化させることが重要です。】

…以前テレビ番組で、病気で声が出せなくなった人がある機器を使って発声することができるようになったと紹介されていた。その機器は喉に当てて振動で発声させるものでした。その機器を使うことで鮮明で聞き取りやすい声を出すことができている、単純に感動しました。その方はラーメン屋の店主で、お客さんと会話がまたできるようになって嬉しいと話していました。声はコミュニケーションにおいて重要な役割を担っているのだと思った。…

【あべのコメント：電気式人工咽頭といいます。】

…私の祖父はつんくみさんと同じ病気にかかって数年前から声が出せなくなってしまった。祖父は話すことがとても好きな人だったのだけど、声が出なくなってからは筆談しかできずにうまく思いを伝えられずにいて辛そうだ。私はできる限り祖父と会話をしたいと努力しているのだが、祖父は字を書くのが面倒なのかあまり話をしてこなくなってさみしい。どうしたらうまくコミュニケーションをとれるのだろうかといつも頭を悩ませている。

…私たちは、ユニバーサルデザインで作られたトイレを「障害者用トイレ」ではなく「多目的トイレ」という名称で呼ぶ。これはバリアフリーに優れた言葉であると感じる。しかし私は、「あ、ここは身障用の駐車場だ」と口にする人、何か他の人と外れたことをする人に向かって「身障だ身障だ」と軽蔑する言葉を口にする人に会ったことがある。そのように身体に障害のある人を「身障だ」と差別的言葉を発することも「言葉で人を排除」しているのと同じことだと考える。第2回の講義では、私も「言葉で人を排除」しないために自分が使う言葉をよく選び、自分の発する言葉にもっと責任を持つと思うきっかけとなった。

…授業資料の動画を拝見した際、流れた合成音声に非常に驚きました。私にとっての合成音声はSofTalkでしたから、現代の技術を目の当たりにして少し鳥肌が立ちました。…

私のような合成音声とあまり縁がない生活を送っている人がいる一方で、合成音声の使用が生活の一部になっている人の存在も認識しました。…マイクに声を入れ、自分の発音を機械が正しく聞き取ってくれるかを試すこともあります。…

【あべのコメント：いいえ。生活のなかであふれています。気づいていないだけ。／それは音声認識です。】

…出版社は、紙媒体だけでなく、例えばusbメモリにするなどして、電子データとしても売らねばと考えました。そうすればocrでは正確に読み取る事が出来なかったという事は解決できると思います。ただ今は電子書籍があるので、もっと気軽に合成音声を使えるようになっています。しかしこれは電子書籍版がなくては出来ないので出版社が動くべきだと思います。

【あべのコメント：著作権の問題です。出版社は利益のために本を販売しているので、データが流出することをおそれています。逆にいえば、著作権がきれたものはウェブで自由に公開していいのです。日本語だと「青空文庫」というサイトがあり、むかしの小説などが無料で読めます (<https://www.aozora.gr.jp>)。】

…先生が授業であげた急病の例について、現在のように電話で病院を連絡するより、各家庭に緊急ボタンを設置し、何回押しにより近いの交番に呼ぶか救急車を呼ぶ方が早いと思う。でもこれを設置するのも非常に大変だね。…

【あべのコメント：大変ではなく、じっさい日本にはあります。「各家庭」ではなく、障害者や高齢者の自宅に設置されている場合があります（希望者のみ）。京都市消防局の例でいえば、「緊急通報システム「あんしんネット119」」 (<https://www.city.kyoto.lg.jp/shobo/page/0000076672.html>)。このウェブページでは「ひとり暮らしの高齢者の方や身体に障がいのある方が、急病や災害などの緊急の場合に、ボタン一つで消防指令センターへ通報することができるシステムです。」と説明されています。総務省消防局の「Net119緊急通報システム 消防救急無線・119番緊急通報」というページも参考になります ([https://www.fdma.go.jp/mission/enrichment/kyukyumusen\\_kinkyutuhou/net119.html](https://www.fdma.go.jp/mission/enrichment/kyukyumusen_kinkyutuhou/net119.html))。】

電話番号しか連絡先を書いていない機関に連絡したい場合、電話を代行してくれるサービスがあるといいのかもしれませんが。…

【あべのコメント：あります。電話リレーサービスといいます。】

「公共機関の連絡先に電話番号しかない」状態を改善するために、電話番号のほかにメールアドレスや、あるのであれば会社のSNSのアカウントIDをのせてもいいと思いました。また、住所も書いてあれば、手紙で送ることも可能だと思います。これらをホームページなどネット上で見られるようにすることを考えましたが、ネット環境が整っていない人のことを考えられていなかったと気づきました。…

【あべのコメント：くわえて、ファックスの番号もあるといいです。SNSのIDというのは時代の変化を感じます。】

公共機関の連絡先に電話番号しかない、ではどうすれば良いか。→チャット機能があると良いと思います。メールだと電話とは違いリアルタイムのやりとりができませんが、チャット機能だとリアルタイムでやり取りが可能なので、チャット機能があると良いと思います。最近では、通販サイトや、携帯会社、クレジットカード会社でもチャットができるようになっていて、電話より手軽さを感じました。…

-----

…私が住む市の公共機関の連絡先調べたら、やはり電話番号しか載っていなかった。考えてみて気になったのは、耳の聞こえづらい人と、メンタルヘルスや女性のための相談。家族関係やDVによっては家の人に自分の声が聞こえてしまう相談はできないから、NPO法人だけでなく市町村の公共機関にもメールやチャットで連絡が取れたらいいと思う。

【あべのコメント：そうですね。あと、DVのように緊急性が高い場合、110番に電話をして「ピザを注文する」という方法もあります。もちろん、その意図が通じないといけません。例：「DV被害の女性、ピザの注文装い警察に通報 米オハイオ州」 (<https://www.cnn.co.jp/usa/35145873.html>)。】

-----

今回の授業を受けて、亡くなった祖母のことを思い出した。私の祖母は60代で病気になり、体を動かしたり、はっきり話したりなどの動作がうまくできなくなった。祖母との会話の中で何といったか一回で聞き取れないことは多々あり、その度に「ごめん、もう一回言ってもらってもいい。」と聞き返した。何回か聞き返しても聞き取れないと、祖母は「ごめんね、大丈夫だから。ごめんね。」と私に謝る。私もそれを聞いて「いや、こっちこそわかってあげられなくてごめん。」と言う。そしてお互いが罪悪感に苛まれ会話が終わる、というのがよくあるパターンだった。当時の私はこの空気が嫌いで、なんとか一回で聞き取ろうと祖母と話すときはじっと口元を見て必死になっていた。でも今思うと、こう言った私の行動が祖母に「自分が重荷になっている」「自分のせいで普通のコミュニケーションが取れない」と思わせ、謝らなくてはという気持ちにさせていたのではないかと。ごめんにごめん返さず、発音が困難な人の言葉を聞き返して聞くのは当然のことだと伝えていけば、あべ先生の使っていた「あ・か・さ・た・な…」など自分で方法を調べていけば、五十音を書いた紙を用意し指を指してもらえるようにいけば、当時の自分に今の“多様性に対する認識”があれば、祖母だけでなく、祖母を介護してくれていた叔父や叔母の助けにもなれたら。少しの意識の差、知識の有無で大勢の人の暮らしやすさが変わる。祖母のように「不自由な自分のせいで」と感じる人をなくし、“誰もが社会の一員として尊重される存在である”と自然に思える社会にしなければならない。…

【あべのコメント：生まれつきの障害者と高齢になって「できないことが増えた」という人では、また違います。生まれつきの人は、ふっきれているんですよ。わりかし。しかし、高齢になってできないことが増えて、自分自身とまどっている人に、「あ・か・さ・た・な」というのも現実的ではない。「サ行？じゃなくてタ行？」というのなら、まだ問題なくいけるかも。】

-----

…どうしても聞き取れない場合は五十音を順番に言っていけば意思伝達はできるということに確かにそうだと納得すると同時に、その場に五十音表があればもっと楽にコミュニケーションが取れるのではないかとも思いました。…

【あべのコメント：文字盤といいます。使っている人もたくさんいます。あとは指さしコミュニケーションボードも有効でしょう。】

-----

…私の祖母は認知症で体もあまり動かさせません。祖母の家に行き、一緒に食事をとることが多々あります。自分では食べることができないので祖父に食べさせているのですが、祖父が口元に食べ物を運ぶ時にタイミングが合わずに祖母の口はあかないことがあります。その時に私は、「あーん」と言うことなどがありますが、私の言ったことが伝わらないことがあります。その時私は、自ら大きな口を開け、見本を見せるようにします。言葉は伝わらなくとも、目は見えるから視覚で言いたいことを伝えていきます。それでも伝わらない場合はどうしたらいいのかは考えたことがありません。それを考えることが「情報のかたちを人にあわせる」ということなのだと思います。…

-----

…個人的な体験として、小学生の時近所に話し方の不明瞭な人がいたのですが、私と話をしたのを見た両親が「よく言葉がわかるね」「話が通じるんだね」と言っていたのを思い出しました。その人が話すことは落ち着いて聞けば聞き取ることができたのですが、自分の意見や考えがちゃんとあって意思疎通をはかろうとすることができても、普通の日本語が話せなければ、聞く気がない人からすれば「日本語が通じない人」「この人とは会話ができない」と思われて、十分な配慮が得られないということはあると思います。会話がスムーズにできないというだけで意見を聞いてもらえないことはとてもストレスだと思うので、このようなことがないように通訳は非常に大事だと思います。…

-----

以前、私がイタリアンのアルバイト先で働いている際に視覚障がいを持っているお客様がご来店されました。普段ならメニューから選んでいただくのですが、コース内容をすべて伝えたり、また料理を提供する際に身振り手振りで料理の説明をするのですが、その時は「お客様の右のお手元でございます」などと説明したりし、聴覚的に理解できるよう努めました。お客様に「ご親切にありがとうございました。とてもいい時間を過ごせました。」と仰っていただき再度来店もしていただきましたが、未だにふと思い出し、もっと快適に過ごしていただけるのではないかと気に掛けることがあります。…

【あべのコメント：はじめてでよくできましたね。すばらしい。きっと常連さんになるでしょう。メニュー内容や料理の位置を説明するのはよくやりますね。視覚障害者としては「3時の方向にスープがある」というふうな説明法があるそうですよ。たとえば「全国ユニバーサルサービス連絡協議会」の「視覚障害者のサポートの仕方」というページが参考になります (<http://universalservice.jp/howto/sikaku.shtml>)。】

私がスーパーでバイトしていたとき、お客様に「駐車券はお持ちですか？」とお声がけをする決まりだったのだが反応していただけないことが多々あった。反応していただけないのはイヤホンをしているお客様か耳が少し遠いであろう補聴器をつけていたりするお客様だった。そこで私は大きな声で試してみるもののほとんどの場合お客様の反応が変わらないことが多数だった。大きな声を出すだけでは伝わらないと感じ、そこから駐車券認証の確認の張り紙を指さしながらゆっくりと「駐車券はお持ちですか？」と声をかけることにした。すると、今まで反応のなかったお客様からの反応がとても増えた。そのほかにも外国人のお客様であからさまに商品を持ち帰るための袋（私の働いていたスーパーではレジ袋が有料だった）をお持ちでないお客様にお声がけをするとき、拙い英語では聞き取ってもらえなかったりお客様が英語が分からないということもしばしばあった。そこで日本語でもレジ袋を指さしながら「レジ袋はご利用ですか？」というだけでイエスと返事をくれたり首を振ってくれたりコミュニケーションが簡単に取れるようになりスムーズに対応できるようになった。この経験から言葉だけで通じない物事の多さを知り、できるだけゆっくり話すこと、近くにものがあれば実際に写真を見せる、指をさすといった簡単な動作を同時に行うことで格段とコミュニケーションがとりやすくなるのではないかと思った。

相手にあった情報の形に変えると聞いて私の身の回りにもあるのかと考えてみた。一つが祖父の難聴である。祖父は耳が遠く聞こえない訳ではないが日常会話に支障が出るほどでテレビの音もあまり聞こえないと言っていた。そこでテレビの字幕を使うように進めたところ、以前よりもテレビの情報を受け取りやすくなったと満足げに話していた。耳が聞こえる方にとって字幕は邪魔なものではしかないが、祖父のように耳が聞こえない方にとってはテレビの音の情報だけでなく、音と視覚に変えることで伝わりやすくなる。これも一種の相手に合わせて情報の形を変えるのではないかと思った。また、最近塾の授業がオンラインになった。今までは生徒の隣に座り解説をする形だったが、今は隣に生徒はいない。解説をする時言葉で説明することが多かったがオンライン授業では言葉だけではうまく伝わらない経験をした。だから、今まで以上にノートに書いて相手に見てもらい言葉で説明する形に変更したところうまく伝わるようになった。授業動画のような情報の形を変えるではないが、このようなこともちっぽけだが相手にあった情報の形を変えるなのかと感じた。そうならば、コミュニケーションを取る際に相手にあった情報の形を変えることはこれから先とても大切なことだなと思った。

社会福祉論を学んだときにも、ユニバーサルデザインや障がい者について学んできた。そこでは障がい者には、「低すぎる期待」というものが、いわゆる健常者からされているという話を聞いた。これは、障がいを持つことで身体の欠如や、運動機能の低下などを余儀なくされている人たちが、健常者には普通のことをしただけであるのに、まるで何かを成し遂げたかのように言われるということを揶揄したものの言葉である。もちろんそれは、日常生活における行動にも関わってくるものであるだろう。…私もマスクによってコミュニケーションがとりづらい部分が増えたように感じる。個別指導塾でアルバイトをしているが、マスクをすることにより指導していても聞こえていないことや、逆に生徒の質問を聞き逃すことが多くなった。マスク一つで表情の情報も消去されてしまう。マスク一つで生まれるコミュニケーションの障害が、ここまで大きいものだと感じたことはなかった。

…私は書店でアルバイトをしています。お客さんにある作者の本を探してほしいと言われ、検索をするためにその作者の名前を尋ねたのですが、コロナウイルス対策でお互いマスクをしていますし、お互いの間には透明なビニールシートまであり、くわえて高齢の方だったため、発声が明瞭とは言えませんでした。そのため私は全く聞き取ることが出来ず、最終的にはお客さんに紙に書いてもらうことで解決することが出来ました。もっと早く紙に書いてもらうという手段を思いつけばよかったのですが、そういった経験がなかったため、問題解決に至るまでに時間がかかってしまいました。…

通訳（日本語から英語、またその逆）の技法を学ぶ授業を取っているが、その中でも日本語を簡単な文章にするという文字通訳と似たような作業がある。私は外国語の通訳をする際はいかに外国語のボキャブラリーがあるかどうかだと思っていたが、その前に母国語を簡単にかみ砕く必要があり、またそこには日本語のボキャブラリーも必要だということを感じさせられた。言語を扱うということは、知識も必要だし、またどのように言い換えていくかという発想力を養わなければならないのだと思った。…

…自分の住んでいる自治体でやさしい日本語が使われているか調べたが、残念ながら使われていなかった。代わりに使用している自治体のホームページを見ると、ふりがな・簡単な言い回しはもちろん、表や地図も大きく載せられており見やすかった。私の住むところは豊田に近いこともあり、外国人も多く住むので是非ともこの取り組みを取り入れてほしいと思った。／＜言葉でひとを排除しないために＞の内容とまさに同じことを、中日新聞の中日春秋というコーナーで見た。コロナに関する用語に関する用語にはカタカナが多く、高齢者にわかりにくい、と。若者である私もパンデミックやロックダウンなどが最初わからず、報道内容が頭に入ってこなかった。コロナで重症化しやすいのは高齢者だと注意を呼びかけておきながら、必要な配慮を怠っていたのだと感じた。

…新型コロナウイルスに関する報道で、日本で感染が拡大し始めた途端、「クラスター感染」や「オーバーシュート」など今まで聞いたことのないようなカタカナ語が使われ始めました。私は聞きなじみのないカタカナ語が当たり前のように使われることに困惑し、その言葉の意味が分からないために報道の内容に集中することが出来ませんでした。意味を理解した今でもその言葉に違和感を感じてしまいます。様々な国の情報が行きかうため日本語に訳すことのできない言葉が出てくるのは当然ですが、漢字を用いて新しい言葉を作ったり、その言葉をそのまま使うのではなく意味を言ったりすることでわかりやすく伝えてほしいです。また、情報を早く伝えることを重視してしまい、独特な外国語を日本語に言い換える工程が省かれてしまっているように感じます。様々な国の情報が行きかう今だからこそ、私たちも伝えられる情報を理解できるよう勉強し、報道関係者もわかりやすく伝える努力をしてもらいたいです。…

【あべのコメント：英語圏の「social distancing」が日本では「ソーシャルディスタンス」となるのも不思議です。「社会的距離」と訳すよりは「人との距離をとる」でいいと思います。韓国では「社会的距離おき（사회적 거리 두기）」と訳しています。各言語で、どんなふうに表現しているのかをチェックしてみるのもいいでしょう。】

「やさしい日本語」について考えたとき初めに思いついたことは、カタカナ語だ。カタカナ語が使われるのは今に始まったことではないが、ここ数か月の新型コロナウイルス関連の報道で今まで以上に、オーバーシュート、ロックダウン、パンデミック、テレワークなどのカタカナ語が飛び交っているように思われる。なかには日本語で表しにくいという理由によりカタカナで表している単語もあるだろうが、日本語にして十分意味が通じるものに関してはなぜカタカナ表記をするのか疑問である。しかし、カタカナでなければよいという考えから、漢字の羅列で表記するようになってしまっただけでは、それは「やさしい日本語」ではないように思われる。私はまだ日本語についての知識が不十分なため、「やさしい日本語」について学ぶことは今後の課題としたい。…

…母や祖母と話しているときに、「大学の授業はしばらくライブ配信とかオンデマンド授業なの。」と言ったら、「オンデマンドって何？」と聞かれるという経験をしました。その時、私は普段から聞き慣れているし、よく使っている言葉だからわかるだけなのであって、普段使わない人からしたら説明がある言葉なんだ、と気づきました。自分が普段何気なく使っているカタカナ言葉は誰にでも通じるものではない、ということ御意識して使っていかなければいけないと感じました。…

【あべのコメント：ギャオ、TVer、Netflix、アマゾンプライムビデオなど、オンデマンド型の動画配信サービスがかなり定着してきましたね。同時に、サブスクリプション型のサービスも多様化してきました。しかし「サブスクリプション」という語を認知している人がどれだけいるかということ、ごく一部でしょう。※定額利用という意味。】

…やさしい日本語、という言葉で思い出したのが、徳川家康の家臣の本田重次が岡崎奉行所の役人であったときに、ひらがなのみの簡単な文で書かれた高札を立てたという話です。どこで聞いた話だったかは忘れましたが、彼は難しいことを簡単に書く者が本当の賢い人間（つまり自分）だという考えであったそうです。しかしわかりやすかったおかげか、みなその法を守ったということでした。現代は政治や経済のニュースは難しくて嫌煙しがちなので、こういった誰でもわかる方法ならもう少し関心を持つ人が増えるかなと思いました。この場合だと文字が読めることが前提ですが。

…私はよくYouTubeで字幕機能を使います。それは頭に情報を入れやすくするためです。そのため先生の動画で字幕が作られているのが個人的にすごく嬉しかったです。自動で作られると、どうしてもおかしな日本語になってしまうからです。ありがとうございます。

オンデマンド型の授業でスライドを見る際に、担当の先生がおすすめされたテキスト読み上げ機能を使うことがあった。読みに困難のある人だけのための機能ではないんだな、便利だなと思い実際に使ってみると、漢字の読み間違いがあったり、文字を読み飛ばしたりすることがあり、使っている種類によるかもしれないが精度はあまり高くないことがわかった。私はテキスト読み上げがなくても差し支えないが、文字をうまく読めず本当にこの機能を必要としている人にとっては読み間違い、読み飛ばしは致命的ではないかと思う。この機能が生まれたことで文章を理解するのが容易になった、助かったという人は多いと思うが、テキストのみを用意して「あとは読み上げを使ってなんとかしてね」というのではなく、マルチモーダル図書のように幅広くメディアのかたちを用意したものが増えていくと良いなと思った。

…僕は先日初めて電子書籍を買ったのですが、文字の大きさや文字の間隔、背景の色などを変えられることに驚きました。以前テレビ番組で肺がんが末期になってくると、本のページをめくるのにも1500m走ったくらい呼吸が上がってしまい本がめくれなくなってくるので、最終的に娯楽はテレビに限られてしまうという話を聞いたことがあります。つまり、本を読むという選択肢が除外されてしまうということになります。しかし、テキストデータとしての本があれば読み上げ機能も使えるし、画面をスワイプすればページをめくることができるので、そういった人でも本を読むことができると思います。書籍のテキストデータ化は、とてもフレキシブルで情報のかたちを様々な人の状況にあわせることができるので、「ことばのバリアフリー」を目指す上で非常に効果的であると思いました。…

OCRと呼ばれることは映像資料の方を閲覧して初めて知ったのですが、私もよくそのような機能を日常的に使っています。例えば海外旅行に行って、現地のレストランで日本語や英語表記のないメニュー表を渡されたとき、私はいつもGoogle翻訳のアプリのカメラをかざすだけで外国語を日本語に訳してくれる機能を使っています。非常にたくさんの言語(アメリカ英語やイギリス英語の様に同じ言語でも地域別のものであるのには驚きました)が用意されていてとても便利なのですが、やはり不自然だったり間違った訳も多いです。このような機能が存在するようになって格段に他者とのコミュニケーションが取りやすくなったのは事実ですが、もっとユニバーサルですべての人々に平等に情報理解の機会を与えようと考えたらさらなる改良や工夫が必要なのかもしれません。また私はメッセージアプリのLINEにおいて、例えば大学の講義で配布されたレジュメなどの写真を撮って送信するとそのレジュメにある文章をスマートフォン上に自動で文字起こししてくれる公式アカウントを入れています。大量の紙媒体資料を持ち歩きたくは無けれど外出先で講義の復習がしたい時などにとても便利によく利用しています。スマートフォン上であれば文章を拡大して読むことも出来ますし、合成音声に読み上げてもらうことも出来るので色々なハンデを抱えていたり、目のよく見えない高齢者などに対しても優しい機能だと思いました。

講義を受けて思ったのは、PDFファイルをみながらYouTubeを見ることができないため全て印刷しないといけないのが少し大変でした。他の講義ではPDFが別に表示されるのですが何か設定すればできるのでしょうか。…

【あべのコメント：パソコンだと、ウィンドウを左右に2つ表示させればいいだけですが、タブレットなどでは困難だったりしますね。】

遠隔授業が始まってから一週間経ったが、二日前にやっとWi-Fiの契約をした。それでパソコンで課題や授業を受けられるようになって本当に楽になった。今回の授業の中でもスマホとパソコンの違いとしてスマホは身体がスマホに合わせるかたちになってしまうとあったがその通りであると感じている。スマホは便利な機能がたくさん備わっていて万能だけど、仕事や文章を書くときなどにはやはり向かない。パソコンでは複数の画面を一度に見ることが出来るしインターネット上で調べていることとアプリで開いているものがクリック一つで切り替えられる。一番手前に表示したり、資料を拡大したり、本当に楽になって今更だが感動している。遠隔授業に対しても、スマホだけで対処していたときよりも意欲が出るくらいだ。…

今日のライブ配信で先生が読まれた文章を完璧に打ち込むことができませんでした。先生がゆっくり読んだとおっしゃって、とても早く感じた…と驚きました。私には90歳を超えた曾祖母がいます。耳が遠いので、曾祖母の家でテレビを見るときは必ず字幕がついています。しかし、曾祖母は字幕を読むスピードが遅く、特にバラエティー番組のように会話のテンポが速いものと字幕切り替えも速くついて行けません。私や家族が笑っていると、「なんで笑っているの？」と尋ねてきます。…

…私は将来通訳者になりたいと思っている。通訳を行う際にも、メモを取ることは非常に大事で、主語・動詞・目的語を聞き取り、文字や記号、絵を用いて自分なりにわかりやすく文字通訳することが必要とされる。大学の英語の授業の中で、この文字通訳を練習したが、かなり難しかった。話される速度に対し文字に起こすのが追いついていないからである。これは、日々活用して慣れる必要がある。…

【あべのコメント：通訳の場合は、自分が思いだせればいいので、記憶の補助として、キーワードをメモすればOK。】

…「多様性のなかの差別とバリア」の項でくおかしいのは自分ではない。こうした自分を受け止めていない社会こそがおかしいのだ」という長瀬氏の考え方に感銘を受けた。世間では男性も女性も成人してある程度経ったら結婚するもの(特に女性は20代後半から30代前半にかけて)という考え方が一般的であるようだ。よくテレビで耳にするのは実家に帰省した際、「結婚はまだなのか、孫はまだなのか」という言葉。高校生の頃、仲の良かったグループでも結婚について次のような話題が挙がった。「30代になっても結婚できなかったら」「最後は妥協だね」「子どもいなかったら自分たちの老後はだれがみるの?」これに対して私はまるで義務のように結婚し、自分の子どもに老後の面倒をみてもらうことをはじめから決めていることに疑問を感じたことを話すと、「変わってるね」と返された。社会ではこれが当たり前とされており、そう思わない人は変わり者だということになるのか。学生のコメントのように千差万別の考えを持つ人間によって構成されている社会が、ある1つの意見だけを常識として他を排除しようとするのは変だ。しかし、おそらく自分も何かにおいてこれが普通だ、そうでないのは理解できない、おかしいと思っていることがあるだろう。…

【あべのコメント：結婚に関していえば、「いつでも安心して離婚できる社会」であることが重要です。そうでない社会は、不公正であり、改善する必要があります。「結婚できるかどうか」は問題ではないし、ましてや「するかどうか」は個人の自由です。安心して離婚できない社会は貧困であり、貧困な社会だからこそ結婚がセーフティネットのように位置づけられてしまう。性差別の現実(賃金格差や雇用差別)が女性を結婚におしやっている現実があり、離婚したくても離婚しづらい状況が維持されている。】

…日本の11%は左利きと言われていて、人口でいうと1000万人以上の左利きの人が存在する。ハサミは左利き専用のものを簡単に買えるが、カッターやフライ返しなど近くにあまり売っていないものも多く、右利き用のものを無理に使うことが多い。しかし、同じ左利きでも私は、右利き用のハサミは右手でしか切れないが、友達も右利き用のハサミでも、コツをつかんで左手で切っていた。同じような立場でもどのように感じるか、どのように対処していくかは全然違うので、ユニバーサルデザインを作るのは、簡単なことではないことを改めて感じた。自分が不便だと感じていることはすぐに発見できるが、他人が何に対して不便だと感じているかは気づくことすら難しい。…

わたしは今回の講義で、自身の左利きについて考えた。わたしは幼少のころ、左利きのために、理不尽だと感じることをたくさん言われてきた。箸やペンを正しい持ち方をしても、直しなさいと言われた。ペンは右で書けるようになったが、箸はどうしても直すことができなかった。また、ハサミやフライ返しなど、右利き用に作られているものは今も使いにくいと感じる。何度もなぜ少数のある左利きが多数の右利きに合わせなければならないのかと思った。このような状況が生まれてしまう原因は、「少数派は多数派に合わせればいい」という考えにあると考える。多様性を前提としていないのももちろんあるが、これまで受けた様々な人の言葉から、多数派の方が強いという認識が根付いていると思った。全ての要素で多数派に属している人は少ないと思う(好き嫌いや得意不得意なことなど)。全ての人に、一度、自分も何かの少数派の一部かもしれないということを考えて見てほしいと思う。

…ちょうど合成音声を外国語の授業でも紹介されていたので、今回の講義はタイムリーな話題だったのですが、私はiTextSpeakerというアプリを使っています。個別で発音の練習をするのは遠隔授業だと時間や音質の問題でできないので、しばらくはこのようなアプリでバリアを解消できるように工夫しなければいけません…。

言葉による情報のやり取りについて考えた時、まず初めに飲食店や美容院などの予約が思い浮かびました。昔は電話予約が主流だったと思います。しかし最近では、インターネットの普及が進み、全てとは言いきれませんが、多くのお店がWebサイトを開設しています。そこには、予約フォームが用意されており、文面でやり取りをすることができます。当然ですが、今まで通り電話予約も可能です。1つのやり取りを行うだけでも複数の方法が存在するので、障害者の方は自分に合った方法を選択すれば良いですし、健常者にも好き嫌いがあると思います。私は電話があまり好きでないので、フォームからの予約が多いです。インターネットは、情報収集や作業効率化だけでなく、バリアフリー化においても役に立っているのだなと改めて実感しました。…



先日10人ほどの友人と通話しながらゲームをした。参加する予定の友人の中には補聴器を着けている友人もいた。通話だけでは聞き取って話すことが難しいということで、その子は結局参加することができなかった。耳に不自由のない人が、耳の不自由な人がいて当たり前だと考えることができたなら、あらかじめ全員が参加できるように準備を整えてからゲームを始めたはずだ。集まった友人は同じ高校の同じ部活の人ばかりで、みんな耳の不自由な友人と話すときにはいつも気を付けてきたつもりだった。しかし離れなければならない状況になって始めて、全く環境が整っていないことに気づき、ショックを受けた。友人のことにも気づけなかったのだから、自分が知らないところで、自分にとってはできて当たり前だと思っていることができずに、公共の場や普段の生活において不自由を強いられている人がいるはずだと気づくことができた。…

…授業を担当してくださっている先生の中で、イギリス人の先生がいます。その先生の授業ではTeamsを使っているのですが、「生徒たちの名前は漢字で、顔写真もなく、一人ひとり特定するのに大量の時間とエネルギーが必要だ。外国人教師にとってこの状況はとても不便なんだ。」と私たち生徒にコメントで主張をしていました。私は外国人教師の困難を考えてもいませんでした。日本人だから、漢字での名前の表記は当たり前。そう思っていました。パソコン画面上でしか伝わらない今だからこそ、日本人でなくてもわかる表示の必要に気が付きました。…

「ことばのバリアフリー」について考えた時に、私は日本語という言語にバリアを感じた経験があり、それは今でも良くあります。12歳の時に日本に来た私はひらがなとカタカナしか読めず、漢字が一切分かりませんでした。漢字が読めないで教科書や問題も読めないというバリアがありました。しかし、二年間、私の中学先生はテストの際、全ての問いに出てくる漢字にふりがなを振ってくれました。ここで初めて他の生徒のように「問題が読むことができる」という同じ条件でテストを受けられるバリアフリーを感じました。…

…教科書や絵本、ポスターなどで、障がい者を題材にしたものは多くありますが、「普通」の登場人物として障がい者が出ているものが少ないのではないかと感じます。誰もが幼い頃から障がいを個性だと考えることができれば、差別するのはもってのほか、当たり前のように手助けをし、寄り添うことができるようになるのではないのでしょうか。

【あべのコメント：映画などでも、「ただの登場人物」として障害者がでてくることがすくない。『ワニ&ジュナ』という2001年の韓国映画では、何気ない脇役としてマイノリティが登場していて、とても印象的でした。】

今回、資料や動画を視聴して、一番感じたことが、ユニバーサルデザインの答えは一つではないということだ。例えば、資料にあったじゃんけんの話で、誰でも参加できるじゃんけんとは何かについて考えた時、すべての人が出来る方法は思いつかなかったが、その場にいる全員が参加できるじゃんけんならいろんな方法が浮かんだ。手を使えない人は脚を使ったり、身体を動かすことが出来ない人は、表情や口の形で表現したり、体ではなく物を使ってじゃんけんをすることも出来る。その場の状況や人に合わせて近くにあるバリアを無くす方法を考えていくことが大切だと思う。…

…言語のかたちについて、私は完全に「手話と点字」をセットにして考えていました。無意識にも自分も有徴化していることに恥ずかしく思いました。「墨字」という言葉も聞いたことがなかったので、辞書で引いてみると「点字に対し、普通に書く文字」とありました。「普通に」というのもおかしくて、誰かにとっては普通ではないよなと思いました。それでも多くの方はそれで理解してしまう。「普通」という言葉は使うのが怖い言葉だなと思いました。「普通」「当たり前」などの固定観念から抜け出していけないといけないと思いました。私が考えた誰でもできるじゃんけんは、口でやるもので、グーは口をすぼめて、チョキはにっこり、パーは口全開です。足でやるのも小さい頃やったりしていました。公共機関の連絡先にはメールアドレスも加えて、話せない状態でも伝えられるようにするとよいと思いました。

…手をうまく動かせない方が考えたじゃんけんの方法を推測してみました。まず、表情でグー・チョキ・パーを表すという方法です。グーのときは唇を尖らせ、チョキのときは口を「い」の形にし、パーのときは口を「あ」の形に大きく開けるといふものです。…

…ジャンケンができる自分を普通とし、出来ない人を特殊とみなすのではなく、出来ない人がどうしたら一緒にジャンケンができるのかを考えるのがユニバーサルデザインにつながると思います。私は小さい頃に小指を折り、右手で日本式の3の指のジェスチャーが作れません。しかし高校の部活の試合練習の審判で手で数を表さなければいけない時がありました。どうしようかと考えて、欧州で主流の数え方（親指から順に立てていく）にしたら部活仲間からツッコまれましたが解決はしました。…

―――  
…チョキは手を交差させる、グーは両手を合わせる、パーは通常のパー。

―――  
「指をうまく動かせない人のじゃんけん」について。手の甲を上に向けたらグー、手のひらを上に向けたらパー、親指を上を手をたてたらチョキ、なら指を使わないじゃんけんができると思う。…

―――  
…私の考えは、それぞれじゃんけんをする人が本物の石とはさみと紙を使えばいいのではないかというものです。「最初はグーじゃんけんぽん」のタイミングで、自分が出したいもの（グーを出したい場合は石、チョキを出したい場合ははさみ、パーを出したい場合は紙）を手にとってもらうのです。自分の手でグーチョキパーを表現することが難しい方も参加できるのではないかと考えました。また、手に取ることが難しい方は指を指してもらえば良いと思いますし、それもまた困難な方には顔を向けてもらったり、視線で示してもらったりすれば参加できるのではないかと思います。目が不自由な方でも石、はさみ、紙は形が大きく異なるので触覚で判断でき、このじゃんけんにも参加できるのではないのでしょうか。どこか不親切な点がありましたら教えていただくと嬉しいです。これまでじゃんけんができない方がいるという事実を考えたこともなく、みんなができるじゃんけんとは、という問いにも向き合ったことがなかったので新鮮でした。…

【あべのコメント：みなさんの提案、どれもおもしろいです。ひとつ考えてほしいのは、「みんなが同じかたちにする必要はないよね」ということです。わかりやすい方法であれば、グーチョキパーのかたちが各自でバラバラであっても、じゃんけんはできるはずです。あと、口を使うアイデアがたくさんでした。手足は動かせないけど口を動かすことはできるという人も身近にいるので、口を使うのはなかなか名案だと思います。しかし「わかりやすいチョキとは？」。】

―――  
…じゃんけんでは口を使う方法を提案したい。グーは口を閉じる、パーは開く、チョキは歯を見せて横に開く、というように表現すれば手が不自由な人でも可能であるのではないかと考えた。…

―――  
…私が考えたのは、顔を使って行うじゃんけんです。パーは口を開けた顔、チョキは「イー」と横に広げた顔（笑顔もいかもしれません）、グーは唇をすぼめた顔。これなら、手が上手く動かせない方でも楽しめると思います。それに加えて、グーチョキパーと声に出してやると視覚障害のある方も参加でき、「だれでも参加できるじゃんけん」になるのではないかと考えました。…私が住む愛知県岩倉市は外国人が多く住んでいます。特にブラジル人が多いです。私が通っていた中学校は1学年3~4クラスあり、どのクラスにも4人ほどの外国人の子がいました。そのような環境の中で中学校生活を送った私は知らず知らずのうちに「やさしい日本語」に触れていたということに気が付きました。外国人の子と隣になることが多かったので、私はよく、先生が説明したことを教えてあげていました。そのときに、先生が言ったことをできるだけ簡単にわかりやすく伝えようと心がけていたことを思い出しました。これがまさに「やさしい日本語」なのだと思います。また、外国人の子たちに配られるプリントにはフリガナがふられていたり、親に見せなければならぬプリントはポルトガル語で書かれたものが用意されていました。さらにテスト用紙も問題は一緒ですが先生が外国人の子たち用のものをつくっていました。これらは、あべ先生がおっしゃっていた情報のかたちを人にあわせることだと思いません。…

【あべのコメント：学校からの連絡が紙で配布されて、日本語が苦手な親が困惑することがよくあります。そこで文科省が「かすたねっと」というサイトを公開しています (<https://casta-net.mext.go.jp>)。このサイトには「生徒への指導・学習に利用できる多言語対応の教材・資料」や「保護者へのお知らせに利用できる多言語対応の文書資料」があります。学校関係者がこれを活用すれば、多言語対応しやすいということです。しかし、学校の文書は保守的ですね。いまだに「保護者のみなさまにおかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。」だの「平素より本校の教育活動にご理解ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。」などとやっている。形式主義がうみだしているバリア。】

―――  
…誰もが参加できるじゃんけんのかたちの話で、指がうまく曲げることができないのなら、指を真っ直ぐにした状態で、①床と垂直にする、②床と平行にする、③手のひらを相手に向ける、のようにグー・チョキ・パーに代わる3パターンを新しく作るなど、すべての人に分かりやすく、かつその人に合わせたルールを作るとよいと思った。…

―――  
…ジャンケンについて考えました。ふと1番に浮かんだのは、手をパー(広げたまま)で手のひらの向きを変えるというものです。手の甲が上ならグー、横向きならチョキ、下ならパーのようにすれば、相手の人も一目瞭然ではないでしょうか。

先日、バイト先に外国国籍のお客様が来店されました。店頭に見本品しかなく「これまだありますか？」と聞かれたので、お調べし、なかったことを伝えました。私の店では在庫がなかった場合、お取り寄せを提案する決まりになっているので、日本語も話せていたし…と思い「申し訳ありませんがお取り寄せとなってしまいまして、本日まで注文いただきますと、\*月\*日に最短でお渡しできますが、如何なさいですか。」と、いつものテンプレを使って話してしまいました。そうするとお客様は、？という顔をされ、そこで伝わっていないことに気がつきました。私は、日本在住なのだから、このくらいの日本語ならわかるだろう、悪い言い方をするとわかっているのが当たり前だ、なんて勝手に思い込みをしてしまっていました。その後私はテンパって「お取り寄せ」「ご注文」などの言葉をやさしい日本語に変換することができずに終わってしまいました。単語は耳にしたことはあった「やさしい日本語」ですが、恥ずかしながら実際に自分で経験して初めて、自分にとって決して無関係なものではないひとつの言語なのだ気がつきました。…

祖母が以前あるCMを見て、「いつも検索検索ってばあちゃんたちはどうやって見れば良いのかねえ」と口にしてたことを思い出しました。情報化が進んでいるからと言って誰もが順応している訳ではないのに、「詳しくは〇〇で検索！」だなんていわれても手段がない。…

もし私が身体障害があり手を握ることができない人のために新しいジャンケンを考えるならばグー・チョキ・パーの代わりに、手の甲・手のひら・手の側面（小指側）を相手に見せるという方法を思いついた。この方法ならば手を握ることができない人だけでなく、指先を動かすことが難しいという人にも取り入れて貰えるのではないかと思った。…

…「誰でも参加できるじゃんけん」について考えたとき、パネルにグー、チョキ、パーの絵を描き、ボタンを押すと出する手のパネルが上がるような構造にし、かつそこにそれぞれ手を示す点字をつけ、全員が出し終わった後は出した手を音声として読み上げる、という、複雑な方法しか思いつかなかった。簡単にできる方法を考えてみると、声に出す、紙に書く、などそれ単体だと参加できない人が現れてしまうような方法しか思いつかず、地球に存在する全ての人がじゃんけんをするとき、全く同じ方法を用いることは難しいと思った。…

…指先を思うように動かすことができない人は、例えば右を「グー」左を「チョキ」下を「パー」として、「ジャンケンポン！」のときに手を右か左か下に動かす。

・視覚障がい者は、最初お互い片方の手を合わせて、相手の手が触れている状態のまま「ジャンケンポン！」でグーチョキパーを出すことにより、見えなくても触感で相手が何を出したかが分かる。

・手を動かすことが難しい人は、口の形でグーチョキパーを表現する。…

「誰でも参加できるじゃんけん」について2つ考えました。2つともに共通しているのは、グーやチョキが出しづらい人でもやりやすく、多数決で決めるということです。どうして多数決なのかというと、手の形だけとかで勝ち負けを決めると少し難しい気がして、多数決の方が単純に勝ち負けが決められると思ったからです。

1つ目は、手のひらと手の甲を出した人数によって勝敗が決まるじゃんけんです。ルールはとても単純で、みんなで同時に手のひらか手の甲を出して、多い方を出した人が勝ちです。例えば、5人でやった場合、手のひらを出した人が3人、手の甲を出した人が2人の時は、手のひらを出した人が勝ちです。奇数人数の場合は一発で決着がつきます。しかし、4人でやった場合、手のひら・手の甲を出した人数がそれぞれ2人の場合があります。その場合は、あいこになります。

2つ目は、1つ目とは違い、手の向きは全く関係ありません。ルールなのですが、どちらの手も出さない、もしくは片手（どちらでも良い）、もしくは両手を出します。この3パターンのうち、一番多くの人が出したパターンを出した人が勝ちです。例えば、6人でやった場合、3人がどちらの手も出さない、2人が片手を出す、1人が両手を出した場合、どちらの手も出さなかった3人が勝ちます。もし、3人・3人や2人・2人・2人と分かれた場合はあいこになります。今回、2つのじゃんけんを考えたんですが、このじゃんけんにもデメリットがあります。2人でやった場合、決着がつかないことです。これが解決すれば、もっと良くなると思うんですが、他に良いのが思いつきません。「誰でも〇〇できる何か」を考えるのは容易いことではないということを改めて実感できました。

【あべのコメント：いいですね。2人ではできないという制約は、ゲームのおもしろさにも転換できる気がします。】

私なりに誰でも参加できるじゃんけんを考えてみた。グーの時は口をすぼめ「ウー」と発音する、チョキの時は口角を上げ「ニー」と発音する、パーの時は口を大きく開き「アー」と発音する、というように、表情と簡単な音声を使うじゃんけんなら、視覚障害や聴覚障害、身体障害の方でも参加できると思う。…

…私が考えた誰もが参加できるじゃんけんを提示する。私は、「表情」でじゃんけんをすれば良いと思う。グーは顔を中心にすぼめる、チョキは口を横にしてはにかむ、パーは口を大きくあける、という風に顔の表情を活用する。無論、顔の筋肉を動かすことが難しい方もおられると思うが。「誰もが楽しめる」はとても難しいことだと感じさせられた。

ユニバーサルデザインについて。僕は左利きなのですが、日常生活で右利きの人が使いやすいように設計されたものを見ると左利きでも使えるように作って欲しいと思うことが多いです。でも、この考え方は多様性について考えていないということがわかりました。なぜかというと、右利きと左利きのことしか考えていないからです。実際には手を自由に動かせない人もいて、ユニバーサルデザインにするのであれば、設計する上でそのような人でも使えるようにもするべきです。僕がこういう考えをしてしまっていたのは、自分がその問題を内側からしか見ていないからだと思いました。内側からしか見ないことで、自分と自分に関係するものしか見えなくなっていました。そこで、問題について外側から考えることで他にも、手が使えない人がいるという選択肢に気づくことができました。この経験を生かしてジャンケンについて考えてみようと思います。手を器用に動かせない人のためというのが一番内側の考えとして、もう少し外側を考えると、耳や目が不自由な人もできる必要があり、さらに外側を考えると体を動かすのが困難な人もできるようにルールを考えます。手を器用に動かせない人のために、手には力を入れるだけ。耳や目が不自由な人のために、接触する形で。体を動かすのが困難な人のために、最小限の動きでできる。それらを考えてできたのが、お互いに手首を持ち合って、グーが相手の手首を強く握る、パーが何もしない、チョキは軽く腕を揺らすというものです。そもそもルールを広めないと思えませんが、これが、最大限考えたルールです。これからユニバーサルデザインを考えるなら、前提として内側にこういった問題があるか把握した上で、より外側、極端に言えば部外者からその問題がどう見えるかを考えると、問題解決のきっかけになると思いました。

…前回の内容になりますが、自分の中で大きな出来事だったので書きたいと思います。私は中学の頃から感想を書きましようとして指示されたときに普通のことしか書けない自分が嫌でそういったことを発表することが苦手でした。今回も皆さんのコメントを読んでそれぞれの経験を生かしていたり、ある人物の言葉を引用してさらに深めて考察したりして自分には浮かばない考えだな、こういう思考ができたらいいなと思いました。しかし、読み進めていくうちに私の考えていた“普通のこと”という認識は間違っていたのではないかなと思うようになりました。もっと内容の濃い文章を書きたいという向上心は忘れずにもう少し自らの独自性を認めてあげようと思います。自分の考える当たり前が他人にとっての当たり前ではないという、わかってはいたつもりで全くわかっていなかったことに気づかせていただきありがとうございます。

【あべのコメント：そうですね。自分で自分を認める（肯定する）のも大事だし、だれかに認めてもらう経験をするのも大事です。キャメロン・ディアスさん主演の『イン ハー シューズ』という映画をおすすめします。】